

## 序 文

『動物衛生学』初版（獣医衛生学教育研究協議会編集）は2018年（平成30年）4月18日に刊行され、この度、第2版が2024年（令和6年）3月に刊行の運びとなりました。この6年の間に、わが国の家畜・家禽生産現場では極めて深刻な家畜伝染病の発生が続いています。2018年9月に26年ぶりに再燃した豚熱は、岐阜県の養豚場と野生イノシシで始まり、瞬く間に本州・四国・九州の一部にまで拡大しました。また、家禽・野鳥における鳥インフルエンザは2020年度から3シーズン連続の発生となり、2022/2023年の家禽殺処分羽数は1,700万羽を超え、過去最大となりました。2019年12月に中国で出現した新型コロナウイルス感染症（Covid-19）は、世界中に拡散し、2023年12月末までに累計7億人が感染し696万人が死亡、現在も感染が続いています。これらの人や家畜・家禽・野生動物における感染症の発生は社会、経済、教育などあらゆる分野に大きな影響を及ぼしました。これに追い打ちを掛けるように地球温暖化による異常気象とロシアのウクライナ侵攻は世界の穀倉地帯に大打撃を与え、人と動物の食糧・飼料生産に大きな影響を及ぼしています。わが国の畜産・酪農は輸入飼料に依存した加工畜産でもあり、食料・飼料自給率が極めて低いことに加えて日本経済の停滞による円安が追い打ちをかけ、特に家畜飼料等の生産資材の高騰が畜産農家・酪農家を直撃し、極めて困難な状況に至っています。

このような激動する社会情勢の中で、わが国特有の国土条件の下での持続的な畜産物生産が強く求められています。『動物衛生学 第2版』は、初版の序でも申し上げましたように、時代に即した実践的内容の教科書編集に心掛け、新たに「ICT技術およびロボットを活用した飼養管理」を加えました。さらに、「家畜伝染病予防法」など関係法規、家畜伝染病の発生動向など最新情報に更新し、新たな執筆者も加わり内容も更新しました。本書の特徴のひとつは獣医学教育モデル・コア・カリキュラムと獣医師国家試験ガイドラインを網羅した内容であることは初版と同様ですが、コラムによる話題提供と情報の深掘りが充実しました。

ご担当頂いた全国獣医系大学の獣医衛生教育担当教員と文永堂出版編集部の松本 晶さんと木村美佐子さんに心より感謝申し上げます。本書が獣医学を学ぶ諸君や、獣医衛生領域・獣医療に携わる多くの獣医師や畜産関係者に広く活用される書籍となることを望みます。

2024年（令和6年）3月吉日

編集者代表 高井伸二